

神殿の檻～淫獄巫女舞～電子書籍体験版～

体験版用に画質、文字解像度を落としてありますが、製品版では高品質版、さらに高画質 JPEG 版を同梱しております。

たちの仲間になった者だっているのよ？ ……まああなたにはそういうの期待してないけどね。最後まで抵抗し続けて楽しませてほしいわあ」

そう言いながら淫獄巫女は2枚目の護符を投げる。毒々しい血色で呪文が描き込まれた紙は、見事柎の股間下へと潜り込んで。

ぽんっという音を立てると、地面を突き破って触手が現れる。「——っひっ！」

その触手を見て柎は息を呑んだ。あまりにも太い触手が、まるで深海魚のようにぐばあっと口を開けているのだ。

大きさはちょうど犠牲になるのである戦巫女のサイズに合わせているのか、股間がしつかりと挟み込めそうな大きさだ。唇の中には牙のように生えた無数の突起、小触手、そして絨毛のような物が生えそろっており、それらがそれぞれ自分勝手に蠢き合っていた。

「戦巫女の清浄な愛液は私たち淫獄巫女にとっても甘露で、貴重なもの。たっぷりしづいてちょうだいね？」

その言葉と共に、口触手が大きくアギトを開けたまま、股間めがけて伸びていく。

「や、やめろっ！ 殺す、必ず殺してやるからっ！ こんな、こんなもので柎の戦巫女が……はあああああああうああああ!？」

わめき立てる戦巫女を完全に無視して、口触手はバクンと股間部分を挟み込んだ。その瞬間、壮絶な痺れが下半身を覆った。粘液にまみれた口触手の牙突起が、すでに湿り始めていた股間

部をがっちり咬んだのである。

そして、そのまま上下にゴリユツ、ゴリユツと力強く上下運動を始めた。そのたびに牙突起が膨らみ始めた陰唇をゴリゴリゴリと力強くかきむしる。何度も何度も繰り返される度に秘められた肉ビラはついにこぼれ始めた愛液と粘液の混合液を吸って、ぽつてりと膨らみ始めた。

「ひっっ、ひゃあうっ!! あひ、ひんっっ!!」

戦闘巫女衣装越しにもくつきりと見える二枚貝を、牙突起は情け容赦なくスーツごとかきむしっていった。この年代の女性ならではのまだ使い込まれていないプリプリの陰唇が、口触手が上下する度にびちびちびちつとはね飛ばされ、さらに絨毛触手で舐めしゃぶるように責め立ててくる。

傷みは全くなかった。それどころか先ほど淫獄巫女に飲まされた媚薬唾液の影響と、口触手に中にたっぷりとたたえられた粘液のおかげで淫らな熱は上がる一方だ。

漆黒のタイツ越しにも分かるぐらくつきりと透けて見える陰唇。そこは口がこぼし始めたわずかな蜜と、触手の粘液でぽっくり開いているのがもはや丸見えだった。その部分をギユツと強く挟み込んだ口触手の牙突起が力強く刺激する。内股から肉ビラ、そして尿道や膣の入り口までもゴリゴリゴリイっとなかきむしられる。

「くひいひいっっっ！ ふうっ、あ、ああおっ！」

そのたびに腰の奥からビリビリするような快樂電流が産まれて、背筋を伝って脳天を直撃する。

浅く敏感な膣の中にタイツごと牙や絨毛触手が入り込み、



入り口の粘膜を滅茶苦茶にかき乱していった。堅いイボがずりゅつと粘膜を擦る度に未だ侵入者を許したことの無い肉壁がざわざわとざわめき、ぷにゅんぷにゅんと押し込まれる度に

「あ、あ、あああつつつ!!」

柀の全身が強く仰け反り、口から歓喜の声が上がってしまう。

ぱつくりと股を加えられているために、不浄の箇所、尻穴にまでその責めは及んでいた。何か物欲しげにスーツの下でパクパクと開閉を繰り返す菊門を、口触手が長いストロークで刮げおとすように擦り立てていく。

「はうううつつ!? そこ、そこだめ、そこ、そこおおお!?」

牙がアナルの中に入り、肛門括約筋を弾き倒していく度にゾクゾクとした不思議な感触が腰全体に走る。しかしそれは決して不快な物ではなく、どこか妖しげな陶酔感をもたらす奇妙な心地よさだ。

その場所と同時に会陰部の八の字筋をを同時にギュッと締められ、擦り立てられる。

「うあつ!? あつ! あつ!!」

腰の奥で官能の稲妻がいくつもぱちぱちとはじけては消え、全身がどんどん昂ぶっていくのを自分でも押さえることができな

い。(柀の……柀の戦巫女が、こんな無様……なあつ……!)

そう思うのだが、全身に回った淫気の毒と、腰から産まれる間断無い快樂のおかげで全身から骨が抜かれたようになりまともな抵抗の一つもできない。

そして、ガツシユガツシユと力強く秘部を擦りたてられてい

るうちに、包皮に隠れていた快感神経の集合体、クリトリスがぷりつとスーツ越しにその姿を現した。もちろん口触手がその敏感すぎる肉豆を見のがすはずがない。

ごりごりごりりつ、かり、こりこりこりつつ!!

「!!!っひ!! はあおおおおおおおおつつつつ!! おつ、おおおおつつ!!」

囚われの戦巫女の身体が背も折れよとばかりに仰け反り、裏返った喘ぎ声を叫ぶ。

クリトリスが乱暴に、しかも数メートルはある目の粗いやすりで削り取られていくような感触。ごりつ、ごりつと縦、横、斜めとほとんどでたらめに全方位を研磨される度に、小指の先程度の器官から強烈なまでの快感電流が走るのだ

おおよそ処女の戦巫女などに絶えられる仕打ちではなかった。

「あああああつつつつ、おつ、おつ、おおああああううううつつつつ!!」

柀の全身がビクン、ビクンと二度三度痙攣する。そして未だ口にくわえられたままの股間からびゆるおびゆるつと粘っこい愛液がタイツ越しに飛び出していく。

それを全て一滴残さず綺麗に飲み込み、柀の痙攣が止んだところできるよう口触手は地の底へと戻っていった。

(はあ……はあ……く……これが……淫の力……すさまじい……。でも、でも……私は柀の頭首、こんなことで、こんなことではあ……!)



「あ、は、ふう……」

と気の抜けたような声を漏らしてしまう。

そのまま、触手達ははまるで餅をこねるように涼子の胸を蹴り始めた。縦、横、斜め、そして引つ張り、押し込み……。スーッとぐしゃぐしゃと揉み捏ねられる度に胸の中で快感電流がわき起こり、乳房の中で反射しまくって最後は乳首と脳天に突き刺さる。

「くはあん……うつつ……くつつ……ふ……」

必死に歯を食いしばる涼子だったが、口の端から押さえきれないよだれが一筋こぼれ落ちていく。

（くそお……胸が……熱すぎて……！）

やがて、両乳首が繊毛触手に巻き付かれ、まるで磨き上げるかのように優しくブラッシングを始めた。

しゅっ、しゅっ、ぬちゅっ、くちゅっ……。

「はああああああ……」

やや堅めの歯ブラシのような繊毛が乳首を一はじきする度に、びりびりびりつと乳首から快感電流が走る。そうやって緩慢で甘い快感に酔っていると、またパンチングボールのような強い刺激が涼子の乳首を襲う。

緩急わきまえた責めで、戦巫女の胸乳をひたすら蹴りまくられた。時折思い出したかのように胸肉をきゅつと力強くもみ上げられると、

「ふああああっつつっ！」

熱湯に放り込まれたモチのようにとろりと胸が溶け落ちそうなほどに気持ちいい。

乳房から産まれた熱は全身に周り、力が抜けていった。乳房で作られた甘い毒蜜のような悦感が漏れ出し始め、身体中を冒す。

下腹部がキュンキュンと切なく疼き始め、スーツの股間部には舟形のシミが生まれ始めた。

愛液でべつとりと濡れた巫女装束の股間部は、もつとも隠しておきたい部分が愛液でべつたり貼り付いて、ほとんど何もはいていないかの結おうにくつきりと透けて見えた。そこには完全に大陰唇は充血してぷつくらとふくらみ、愛液を後から後から流れ出させて止まらない膣孔がひくひくと物欲しげに蠢いている。

（も……もう……腰があ……）

そして、一気に弛緩したかのようにすとんと腰は落ち、足はみっともなく広げられて大股開きをする羽目になってしまった。

ひくひくと何かを入れて欲しそうに蠢く淫裂。淫魔はその場所を慰めるために新たな触手を送り込んだ。

それは花のつぼみのような形をしていた。その先端に細いピンを洗うようなブラシのような触手がうねうねとのたうちかえっている。

（もしかして……おしべ!?）

涼子のはつとした。この鬼花は自分と交配をしようと目論んでいるのだ。









神殿の檻～淫獄巫女舞～電子書籍体験版～

制作著作：PaletteEnterprise

- ・本書は18歳未満の方の閲覧をお断りしております。
- ・本書の内容はあらゆる犯罪行為を肯定、助長する物ではありません。本書に記されている内容を実行した場合、犯罪行為となる恐れがあります。
- ・本書の内容に関する権利は全てPaletteEnterpriseが有しています。無許可での再配布（ネット上へのアップロード、対価を伴わない共有行為、交換行為を含みます）を禁じます。また、著作権法に定められた例外以外での複製は禁じます。該当事実を確認した場合、刑事法的処罰の請求、民事法的損害賠償の請求を行う可能性があります。